



3年生 目次

3年1組 1・2ページ

3年2組 3・4ページ

3年3組 5・6ページ

三年一組

県文集「ともだち」入賞作品（読書感想文）

「はなちゃんのみそしる」を読んで

松尾 佳奈

はなちゃんは、日本一早起きの小学生です。

わたしがこの本をえらんだ理由は、早起きをして家族のために「みそしる」を作るはなちゃんがすごいと思ったからです。

わたしは、小学二年生のころからお母さんのお手つだいをよくするようになりました。ほうちようで野さいを切ったり、サラダを作ったり、とうふとわかめのおみそしるを作ったりします。でも、お母さんが横にいないとできません。

はなちゃんのお母さんは、はなちゃんが五才の時に「がん」という病気でなくなりました。お母さんは、なくなる前には、はなちゃんにおみそしるの作り方だけでなく、たくさんのお話を教えたそうです。おせんたくものをほしたり、たたんだり、そうじをかけたたり、保育園のじゅんぴも一人でできるように教えたそうです。いつもは歌が上手で、人をわらわせるのが大好きなお母さんですが、教えるときはちよつとこわかったそうです。わたしは、はなちゃんのお母さんは、自分が死んでも、はなちゃんが家の事をいろいろできるようにしてあげたいという気持ちがあったからだと思います。

わたしが心にのこった場面は、毎日朝ごはんの前に、お母さんの写真に手を合わせて、

「ママ、パパとはなは、もうだいじょうぶだよ。」

と、話しかけることです。夜になると、お母さんの写真の前でお酒を飲みながら泣いているお父さんがえ顔になるように、毎朝、早起きしてみそしるを作るのだそうです。わたしがはなちゃんの立場だったら、お父さんといっしょに泣いていると思います。悲しいけど前向きにがんばるはなちゃんは、やさしくて心が強いと思います。きっと天国のお母さんは、そんなはなちゃんを空からおうえんしていると思います。

これからは、お母さんのお手つだいをもっとがんばって、いつか一人でみそしるが作れるようになりたいです。そして、はなちゃんのようにやさしくて、



心の強い女の子になりたいです。

県文集「ともだち」入賞作品（手紙文）

おじいちゃん、ありがとう

橋元 大暉

いねかりの時期が来ましたね。おじいちゃん元気ですか。ぼくは元気です。毎年、おいしいお米を送ってくれてありがとう。おじいちゃんのお米を食べて、野球をがんばっています。

夏休みに、家族みんなで田植えの手つだいにいった時、おじいちゃんがぎかきに乘ってなえを植えて、ぼくたちがぎかいで植えられないせまいところを手で植えたね。と中からこしがいたくなつた時、おじいちゃんの大へんさが少しわかったよ。ぼくが、なえが入っていた箱をあらう仕事を手つだら、

「ありがとう。」

と、おじいちゃんが言ってくれて、うれしかったよ。

毎年、かごしまに田植えのお手つだいにいっているけれど、

さいしょ、ぼくはおじいちゃんのおんぼに行くのがこわかったんだよ。だって、おじいちゃんの田んぼは山の中にあつて、イノシヤやへびがたまに出てくるから。でも、今は、おじいちゃんといっしょだから、もうこわくないよ。

田んぼには、ジャンボタニシがたくさんいて、ぼくはびっくりしたよ。

「ジャンボタニシは、大切ななえを食べてしまうがい虫だ。」

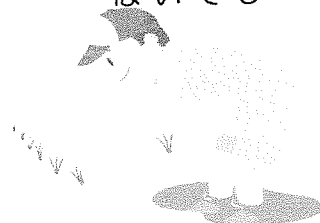
と、おじいちゃんが教えてくれたので、ぼくは、あみを使ってたくさんつかまえたよ。なえが大きくなるまで、おじいちゃんは何度もジャンボタニシをつかまえたり、なえの様子を見に行ったりしているんだってね。ぼくたちが手つだつたのは、田植えだけだったけど、お米をしゅうかくするまでに、おじいちゃんたちは、たくさんがんばっていることが分かったよ。だから、お米一つぶ一つぶを大切に、のこさず食べるね。

おじいちゃん、ありがとう。来年もまた、田植えの手つだいにいくね。

れいわ三年十月

かご島のおじいちゃん

橋元 大暉



たきだてごはん

山本 莉央

すいはんきから、
「グツグツ。」

とごはんがたける音がして、おいしそうなおいがしてきました。わたしは、この音においが大すぎです。急におなかがすいてきます。そして、急いすいはんきの所に走っていきます。すいはんきを開けると、けむりがふわっと出てきました。まるで、うらしまたろうの玉手箱のようで、おもしろいです。あつあつのおいしいごはんがたきました。口の中に入れると、ふっくらで、少しあまい感じがします。

おばあちゃんが、

「おいしいごはんがあつたら、つけものとみそしるだけで、他はなにもしらない。」

と、よく言っています。おばあちゃんの気持ちがよく分かります。わたしは、あつあつのごはんを魚といっしょに食べるのが好きです。プリやシャケがあれば、さい高です。

ところで、たきだてのごはんではないのに、外で食べるおにぎりは、なぜかとてもおいしいです。きっと、みやこのじょうは美しい山や川があつて空気がおいしいので、おにぎりだけでおいしく感じるのかなと思います。

「みやこのじょうの空気はおかすになる。」
と、わたしは思います。

わたしたちがおいしくごはんを食べられるのは、農家の人たちのおかげです。農家の人は、虫がつかないようにしたり、草をとったり、台風心配をしたり、お米がわたしたちの口に入るまで、がんばってお米を作っているとおばあちゃんに聞いたことがあります。学校の帰りに、農家の人が、暑い中、がんばって作きようをしているのを見て、本当に大へんだなあと思いました。

これから、ひとつぶものいさずにごはんを食べたいです。



「ホカリさんとなつともだち」を読んで

藤田 晴翔

ホカリさんは、ゆうびんはいたつ員で、動物たちに手紙をとけています。この本は、三つの物語に分かれています。その中で、ぼくがおもしろいと思うたのは「かまきりのてがみ」というさいしょのお話です。

暑い夏の日、ホカリさんが自転車で野原を走っていると、ぼうれんをしているかまきりに会いました。ぼくは、かまきりがどんなぼうれんをしているのか気になりました。

かまきりは、ぼうれんに行く前に、あさがおたちにぼうれん

したことを手紙でつたえるやくそくをしました。かまきりは、

「ホカリさんの自転車に乗せてもらって、町中を走ったら、すごいぼうれんができる。」

と思って、二人で自転車のぼうれんを始めました。きらきら光るこがね虫や、かいじゅうに見える木のかげ、地面から雨がふってくるように見えるぶん水を見つけました。かまきりは、うれしくなって次々に手紙を書きました。ホカリさんも手紙を書くお手つだいをしました。弟の手伝いをしてよろこんでもらった時のほくの気持ちと同じだと思いました。

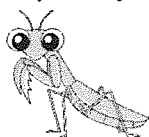
ホカリさんが、いきおいよく坂道を走り出した時、かまきりがバランスをくずして、書いていた手紙がとんで行ってしまいました。かまきりは悲しんでいると思っていました。そうではありませんでした。楽しいぼうれんが待っていて、手紙を書いても書いても書き終わらないことに気がついたからです。そこで、最後に一枚だけ手紙を書いてあさがおさんに届けたいとお願ひしました。その手紙には、

「いっばい、いっばい、いっばい、持って帰るよ。ぼうれんのお話！
待っていてね。かまきり」

と書いてありました。こんな手紙をもらったら、ぼくはわくわくします。

この本を読んで、ぼくもすごく楽しいことがあつたときは、かまきりのように直せつ会って話したいと思います。でも、今はコロナ感せんよぼうれんのために、遠くに住んでいるひいおばあちゃんには直せつ会つことがあまりできません。だから、手紙に書いてつたえたいです。

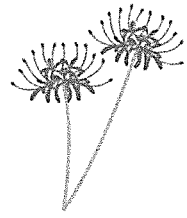
「いっばい、いっばい、いっばい、持って帰るよ。学校のお話！待っていてね。晴翔」



三年二組

県文集「ともだち」入賞作品

お母さんとのさん歩



久保田 菜晴

「すすしいから、さん歩に行こうか。」
と、お母さんが言いました。

日曜日の夕方のことです。

わたしとお母さんは、フリスビーを持って、近所のふく島池に向かってさん歩に出かけました。

ふく島池に着くと、池の横にある広場でフリスビーをしました。わたしがなげる時、ちょっとずれたけど、お母さんはちゃんとキャッチしてくれたので、少しうれしかったです。十分ぐらいフリスビーをしました。あせをかいたけど、風がすすしかったので気持ちよかったです。

次に、ふく島池のまわりを歩きました。草が生えている所に、赤いひがん花がさいていました。まっ赤で、きれいな花火みたいでした。そのとなりにねこじゃらしがありました。それを一本つんで、家のねこの「いちご」へのおみやげにしました。また歩いていると、今度は、白いひがん花がありました。わたしは、見たことがなかったので、めずらしいと思いました。白いひがん花は、まん中へんがうすいピンク色に見えました。

それから、田んぼのまわりを回っていると、いねに赤いつぶつぶが集まったものがついているのが見えたので、お母さんに聞くと、
「いねを食べる虫のたまごだよ。」

と、教えてくれました。タニシのたまごだそうです。色はきれいなのに、これがいねを食べるのかとふしぎな気がしました。

わたしとお母さんは、もう一回、ふく島池を回って帰りました。

家に帰ると、お兄ちゃんが、

「おれも行けばよかった。」

と、言いました。もう一人のお兄ちゃんは、

「すすしかった。」

と、聞きました。ねこのいちごは、ねこじゃらしで遊んであげるよ、とても

よろこんでいました。

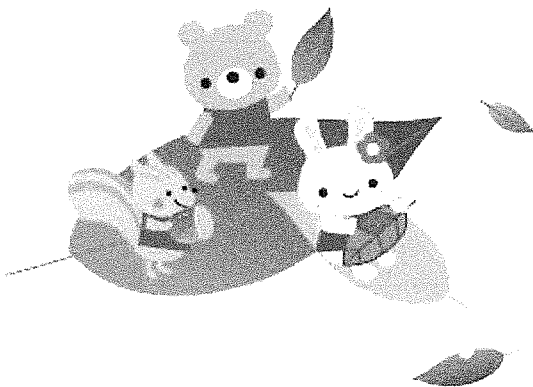
この次は、お兄ちゃんたちもいっしょにさん歩したいなと思いました。

県文集「ともだち」入賞作品

秋になると

風がだんだんすすしくなって
葉っぱをひらひら落としていくよ
もみじやいちごの黄色や赤の
葉っぱのふとんでねてみたい

日がだんだん短くなって
暗くなるのが早くなるよ
外で遊べる時間も少なくなつて
おばけでそうでこわいなあ
もしもおばけが出てきたら
葉っぱのふとんにかくれるよ
でもね、カサカサ、パリパリ
葉っぱの音で見つかるかなあ



新地 颯悟

ぼくがオムライスを好きな理由

川野 義美

「よし。」

と、ぼくに元気のスイッチが入るメニュー。それは、オムライスです。ぼくは、お母さんが作るオムライスのおにぎりが大好きです。その理由をしようかします。

一つ目の理由は、なんといってもおいしいからです。ケチャップごはんの味がとてもおいしいのです。だから、たまごでつつまれている中、中が白ごはんやふりかけごはんではだめなのです。ケチャップごはんの、すっぱくもなく、あますぎもなく、ぼくにとってちょうどいい味が一番のお気に入りなのです。

二つ目の理由は、ケチャップのデコレーションです。いつも、自分でたまごにケチャップをかけて仕上げをします。顔をかいたり、文字を書いたりします。ケチャップをかけすぎてしまうこともあります。

サッカーのおべん当には、いつもモンスターボールのおにぎりを作ってもらいます。それは、上がオムライスごはん、下は白ごはん、まん中にのりをまいて、本物のモンスターボールみたいなおにぎりです。それを何こか食べるとサッカーでもがんばれます。

サッカーの練習が夜にある木曜日は、ばんごはんを食べて行きますが、おなかですくので、帰りの車の中でモンスターボールのおにぎりを食べることがあります。つかれがふつとびます。

このように、オムライスが大好きなぼくのために、お母さんが作ってくれるオムライスのおにぎりは、ぼくにとって、なくてはならないごちそうです。

ぼくの先生にしようかしら、
「今すぐ食べたい。」

と、言ってくれました。

オムライスには、ケチャップ味のチキンライスだけではなく、楽しいことがたくさんつまっていると思います。みなさんもぜひ作って食べてみてください。



大切な家族

宮田 愛莉

「もも」と「めろん」と「ゆず」。食べ物みたいだけど、じつはねこの名前です。わたしの家でかっている三びきのねこたちをしようかします。

ももは、一番さいしょに家に来たねこです。とらねこで、家のにわにいて、お兄ちゃんがほしいと言ったからかうことになりました。ももは人なつこくで、名前をよんだらよって来るし、夜はそいねもしてくれます。ときどきこみ箱をあさって、ティッシュとかをちらかします。つめ切りがきらいで、つめを切ろうとすると手をかむことがあります。それがなかつたらもつとかわいいのと思います。ももの色は、はい色と黒です。肉球は、あんまりピンクではないです。ももは田なだが好きなので、お日さまのにおいがします。

めろんは、家に二番目に来ました。ペットショップで買ったねこです。めろんは食いしんぼうで、ねこのごはんをつこうとすると、台所に上って食べようとします。そんな食いしんぼうなのに、めろんは体が弱いので、たまにほっさを起こします。めろんはつめ切りをしてもかまないし、あばれないので、わたしでも楽につめ切りができます。めろんの色はオレンジと白です。すきな場所は、こみ箱とテレビの前です。

三番目に来たのが、ゆずです。ゆずは、めろんと同じペットショップで買いました。わたしに一番よくなついていてくれるけど、あまがみされるといいます。ゆずは、やんちゃで、めろんと追いかけていたり、ねずみのおもちゃや風船で遊んだりします。ゆずは、ももと同じでいたずらをするし、つめ切りが苦手です。たまに、ゆずがごはんをのこすとめろんが食べます。ゆずの色は、黒と白です。すきな場所は、リビングのキャットタワーです。

三びきとも、大切な家族ですが、一つだけおねがいするとなれば、とくにめろんですが、わたしのプリントに乗るのをやめてほしいです。



三年三組

生きていく上で大切なこと

溝邊 葵育

「生きていく上で大切なことは何だろう。」
とわたしは、考えました。

どの本を読もうかまよっていたとき、お母さんが、
「この本は、これから生きていく上で人として大切なことが書かれている本だから読んで方がいよ。」
と教えてくれました。

わたしを読んだ本は、「星の王子さま」という本です。星の王子さまは、小わく星B612というとても小さくぶつうの家よりちょっとだけ大きいくらいに星に住んでいます。その星には、「赤いバラ」が一本さいています。そのバラを王子さまは、とても大切にしていました。しかし、そのバラがわがままだったので、王子さまはちよつといやになりました。そこで、新しいお友だちをつくるために、しばらく自分の星をはなれて、旅をするにしました。王子さまは、いろいろな星を旅して、七番目に地きゆうにきました。そして、「キツネ」やひ行きがこしょうしてサハラさばくにふ時着した「ほく」と出会ひ、時間をかけて「きずな」をつくり、お友だちになりました。その後、「キツネ」や「ほく」とすこす中で、大切にそだててきた一本の「赤いバラ」が自分にとってとても大切なお友だちであることに気づいていきました。



わたしにも大切なお友だちがたくさんいます。わたしが小学校に入学したときわたしが通っていたようちえんのお友だちは、ほかの学校に入学しました。だから、さいしょは、お友だちがいなかったもので、少しさびしい気持ちでした。だけど、たくさんお話をしたり、遊んだりして、たくさんお友だちができてきました。これも長い時間かけていっしょにすこし、おたがいがやさしくすることと、「きずな」ができたからだと思います。これから生きていく上で、わたしも星の王子さまのように「やさしい気持ち」を大切に、これから出会うたくさんの人と、時間をかけて「きずな」をつくり、お友だちになっていきたいと思っています。

「おに遊び」という本を読んで

木下 龍星

ぼくは、本を読むことが大好きです。だから、学校からの宿だいで読書感想文が出た時、どの本を読もうかなという気持ちになりました。ぼくは、図書館へ行きました。すると、「おに遊び」という本があったので、この本を借り家に帰り、すぐに読みはじめました。

おに遊びの本にはタイトルがいくつかあり、その中の「だるまんがころんだ」というタイトルを読みました。「ケン」という主人公が出てきて、ケンはお守りを持たずに春の山に山菜を取りに行くと、おにに目をつけられて、おにとケンで「だるまんがころんだ」のしょうぶをするというお話でした。

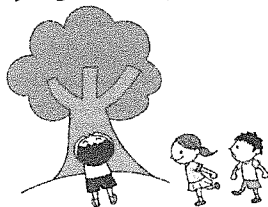
この本で気になったところは、ケンとおにが、だるまんがころんだのしょうぶをしてケンがおににかつたところとこです。ここが気になった理由は、こわい思いをしながらだとおににはかてないと思ったからです。ぼくは、なぜかてたのだろう、しょうぶしながら考えるってすごいなと思いました。

ほかに、お母さんやおばあちゃんに言われたのにお守りを持っていかなくつたところが気になりました。なぜならケンが持っていかなかったことで、おにが近づいてきてこつかしいからです。

ぼくもケンと同じようなことがありました。二年生の時に、プリントや宿だいをちゃんと家でしていたのに、学校に行った時、めんどくさくてい出しなことがたくさんありました。「めんどくさいなあ。」「まあ、出さなくてもいいか。」という気持ちがあり、かつてに自分ではんだんしていたからです。この時、ランドセルにかくしていたプリントを、家でお母さんが見つけた時に、「プリントをがんばってやつたのに、お母さんもいっしょうけんめい丸つけしのに、何で出さなかつたの」

とすこくがっかりしておちこんでいるすがたを見てぼくはこつかしいました。このことを思い出し、ケンもお守りをしっかり持っていれば、こんなことにはならなかつたし、言うことをきいていればよかつたという気持ちだったのではないかと思いました。

この本を読み終わって、ぼくは親のいうことを聞きながら、よいこととわるいことのはんだんができるようになったと思います。うそをついて、言う



ことを聞いていないとこわい目に合うし、信ようしてくれている人をうらぎりがっかりさせてしまいます。だから、これからまわりの人たちの言つことをちゃんと聞き、相手の立場になってどう思うかということを考え、たくさんの人から、信らうしてもらえような人間になっていきたいです。

せんそうはともつらいこと

柏木 聡太

ぼくは、「ちいちゃんのかげおくり」を読む前にこのように思っていました。せんそうの時は、今よりどれだけつらいのかな、せんそうではばくだんなどが落ちてくるだけなのかと思っていました。

しかし、この物語を読んでぼくの考えはかわりました。せんそうは、家族やくらしをうばってしまうものだと分かりました。だから、今はせんそうがあつたときよりもとても平和な時だいなのだと感じました。

今も、ここにしょういだんなどが落ちてきたらちいちゃんと同じように家族や友だちなどもすべて失ってしまうと考え、とてもこわくなり、ちいちゃんがとてもかわいそうに感じました。家族や友だちを失い、一人になってしまうことはとてもさびしく、つらいことだと思っています。

今の日本では、せんそうがないけれど、ほかの国ではまだせんそうをしているところがあると聞いたことがあります。だから、日本でせんそうが起きていないことはとても幸せなことだと思います。

ぼくは、これからほかの国などで起きているせんそうもなくなつてほしいと思います。そのためにできることとして、まずは、みんなが思いやりの気持ちや、やさしい気持ちをもち生活することが大切であり、ぼくもこの気持ちをもち、友だちや家族といっしょに生活していきたいです。



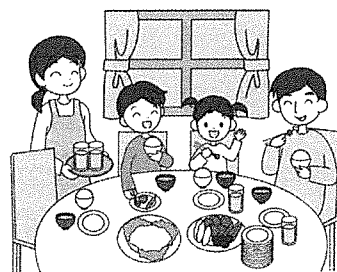
家族は大切なもの

宮下 奨琉

ぼくは、ちいちゃんのかげおくりというお話は、楽しくかげおくりという遊びをする面白いお話だと思っていました。けれど、ちいちゃんのかげおくりを読んでみて、せんそうの悲しいお話なのだと思います。

ちいちゃんは、ずっと家族と楽しくくらしていきただけで、お父さんはせんそうに行き、お母さんとお兄ちゃんはせんそうのばくだんでなくなつてしまい、一人ぼっちになってしまいます。それでも、家で家族のことをずっと思い、待ちつづけようとするちいちゃんがかわいそうに見えました。ぼくは、こんなちいちゃんのすがたから、家族や友だち、自分の命の大切さに気づくことができる。そして、ちいちゃんのように家族を大切にする思いをもち、自分の思いをいっしょけんめいになえようとすることも大切だと思います。

ぼくはこれから、がんばりたいことはいつも家族のことを大切に思う気持ちをもつことです。これまでぼくは、お父さんやお母さんに、思いやりのないことをしたり、言ったりしていました。だけど、これからは、家族にやさしくして生活していきたいです。そして、これからは今よりももっと家族とのきずなを深めて、幸せな時間をくすくすしていきたいと思っています。



昔も安全なくらしだと思っていた

榎田 華美

わたしは、昔のくらしも今と同じように安全なくらしをしていたのだと思っていました。しかし、安全なくらしができなかった時だいがあつたことというのを「ちいちゃんのかげおくり」を読んで知りました。

わたしは、せんそうではばくだんが落ちてくることは知っていたけれど、これだけかわいものだと知りませんでした。わたしは、「夏のはじめのある朝、こうして、小さな女の子の命が空にぎえました。」という場面が、今でも心にのこっています。

わたしには今、五さいの妹がいます。だから、昔のことはわたしと同じようによく知らないと思います。だから、「ちいちゃんのかげおくり」の読み聞かせをして「昔こういうことがあつたんだよ」と教えてあげたいです。そして、家族と安全に楽しくらせている時間を大切にしていきたいです。